

10秒ルールは、やりたいけどなかなか手が出せないこと、先延ばしにしていたことなど、いろいろなことに使えます。何かを実際にする人としらない人の違いでよくあるのは、「失敗したらどうしよう」と考えすぎたり、めんどうだから後にしよう、などと大事なタイミングを失う前に、自分をプッシュしてやってみる行動力があるかどうかだと思います。「行動力」は変化が続く今後の社会でより必要なスキルといわれており、練習することですぐに身につくものではありません。

また、何かの行動を起こした後は、成功しても失敗しても何らかの学びにつながります。やらずに後悔している人の方が、やって後悔する人より圧倒的に多いのはもったいないです。^②一度本を閉じて、小さな行動でいいので、実際に10秒ルールを使ってみてください。

これから先の将来、あなたはまだ誰もしたことがない、聞いたことのないことに挑戦する機会に出会うかもしれません。また、いったん何かのスキルを身につけても、世の中の急速な進歩に伴って、スキルの向上や更新をする必要も増えてくるでしょう。長い人生の中で、何歳になっても学ぶことに遅すぎるといえることはありませんが、10代の頃から新しいことに挑戦して学ぶ癖をつけられれば、自分の可能性を広げていくのに役立ちます。

そこで「10秒ルール」に続けて提案したいのが、「二日一新」です。これも簡単なチャレンジです。毎日何か新しいことをする、というのを、1週間でも1カ月でもいいので続けてみてください。

大きな行動でなくていいのです。学校の行き帰りにいつもと違う道を歩く、いつも話す相手ではない友達と話してみる、違うグループと昼ごはんを食べる、ふだん読まないジャンルの本を読む、授業で質問してみる、家で家事の手伝いしてみる、苦手な野菜を食べてみる……など、どれだけ小さなことでもかまいません。とにかくいろいろなことをしてみましょう。「B」自分の「すきやり」^{注1}につなげてもいいですが、時には(③)のものや、人と出会うこともおすすめてです。これらを習慣にすることで、新しいことに挑戦する力や、生涯学び続ける力の基礎を鍛えることができます。

〈中略〉

人間は一人では生きていけませんし、たくさんの人と時間をともに過ごす中で、他人と自分を比べてしまうのは自然なことです。でも、他人の目を気にしすぎて悩む人は多く、集団の和を重んじる日本人は、特にその傾向が強いといわれています。

もちろん、他の人を参考にして学べることも多くありますが、そこに自分という柱がないと、他人に振り回されてしまいます。

ここでは、そうならないための提案、さらに自分と向き合い、自分を知るための提案をしてみます。「(⑤)」というように、自分自身のことには意外に見えにくく、意識して向き合わないとなかなか理解しにくいことがあります。自分を知るには、いろいろな方法があるでしょうが、私が最初に提案したのは、長時間ペースを保つ必要がある活動をして、「自分のペースがある」ということを実感することです。たとえば、私の過去の経験から、長距離を自分のペースで走ってみることをおすすめてみます。可能であれば、他の参加者がいるミニマラソンなども試してみてください。

人生はマラソンにたとえられることがあります。確かにマラソンは走る道は長く、上り道も下り坂もあり、誰かに抜かれた時は悔しくて抜き返したくなるし、誰かを抜いた時は気分が高揚してスピードアップしたくなるかもしれません。「C」、過去の陸上部時代の私のように、他の人にペースを乱されれば、疲れて完走できなくなってしまうのは自分自身です。正直、他人は自分が思うほど自分のことを見ていません。人それぞれペースがあり、まずは自分のペースで進む練習をすることで、少しずつ他人のペースに惑わされないようになります。

走る以外にも、自転車、水泳など、または運動ではなく勉強や趣味に関することでも、自分に合う方法で続けてみてください。何かを自分のペースでコツコツ続けると、少しずつそれが形や成果になり、自信や自己肯定感にもつながります。

また、それが音楽や絵画、文章など、何かを作ったり表現したりする活動なら、自分らしさを見つける練習にもなります。お話ししてきた通り、私は演劇やダンスを通して自分を知ることにつながり、モンゴルでのヒップホップ教育や、モリタニアのマリ難民キャンプでの活動で、モヤモヤしている若者が自己表現を通して自分を見つけていく場面を見ました。いろいろな表現を試してみ、振り返って自分がどんなものをどう表現するかを見つけてみてください。また、自己表現は自分を知る以外にも、他人に向けての表現力向上にもつながります。

自分らしさを見つけていくのは、自分のペースと「すきやり」を見つけて集中するプロセスを経て、自分を少しずつ知っていくことです。どうせ比べるなら、他人ではなく、いろいろな行動してみた後に以前の自分自身と比べてみて、少しでもなりたいたい自分を目指してみてもいいかもしれません。

〈岡本啓史「なりたいたい自分との出合い方 世界に飛び出したボクが伝えたいこと」〉

注1 すきやり——本書では「自分の好きなこと」と「自分のやりたいこと」を合わせて「すきやり」と呼んでいる。

問三 部②とありますが、筆者がこのように言うのはなぜですか。説明しなさい。

問四 空欄(③)にあてはまる内容を次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 自分に向いていると感じられる分野
- イ 自分がまったく関わらないような分野
- ウ その方面に詳しい人が周りにいる分野
- エ 自分の将来に役立つと感じられる分野

問五 部④とありますが、それはどのような「傾向」ですか。答えなさい。

問六 空欄(⑤)にあてはまることわざを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 五十歩百歩
- イ 立て板に水
- ウ 灯台下暗し
- エ 時は金なり

問七 本文の内容としてふさわしくないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 音楽や絵画などの活動を通して自己表現を行うこと
- イ 自分を知り自分らしさを見つけることで、他者を思いやる共感力だけでなく他のライフスキルも向上するといわれている。
- ウ どんな自分になりたいかを考えていろいろな行動を起こすことで、すこしでも理想の自分に近づこうとすることが大切だ。
- エ 他人と自分を比べてしまうのは自然なことなので、他者のペースに合わせてながら徐々に自分のペースを確立することが大切だ。

二 次の文章を読んで、下の問いに答えなさい。

昔、キリコさんという名のお手伝いさんがいた。母は常時、二、三人のお手伝いさんを雇っていたが、若い人が多かったので、たいていは結婚のために数年で辞めていった。すると母は教会の信徒会に頼んで、また新しい人を紹介してもらったのだ。

キリコさんもそんなふうにして我が家へやって来た。確か、婦人部の支部長の、遠い親戚にあたる娘さんで、以前は家具工場で事務員をしていたらしい。ただ、家にいた期間が、私が十一から十二歳になる間の一年足らずと殊更に短く、しかも唐突に恒例のさよならパーティーもなく辞めてしまったために、そのあたりの事情はもうほとんど忘れてしまった。

目鼻立ちのはっきりした、肉付きのいい人だった。アイシャドーは水色で、唇には当時流行のグロス入りの口紅が、はみ出すほどたっぷり塗られていた。なのに髪の毛には構わず、無造作に輪ゴムで縛ったり、あちこちへアピンで留めたりしていた。

(中略)

十一歳の夏休み、仕事で一カ月ヨーロッパを回っていた父親から、お土産に万年筆をもらった。銀色で細身の、スイス製の万年筆だった。

キャップを取ると、磨き込まれた流線型のペン先が現われ、それは見ているだけでも胸が高鳴るほど美しく、持ち手の裏側にはその曲線によく似合う筆記体で、私のイニシャルYHが彫ってあった。

おもちゃ以外のお土産をもらうのは生まれて初めてだったし、まわりで万年筆を使っている子など一人もいなかったから、自分が一足飛びに大人になったような気がした。この万年筆さえ手にしていれば、何か特別な力を発揮できると信じた。

私はいつどんな時も、書きたくて書きたくてたまらなくなった。国語の漢字練習帳があるからと母に嘘をつき、お金をもらって大学ノートを買った。学校から帰るとランドセルを置き、真っすぐ机の前に向かってとにかく万年筆のキャップを外した。

いざとなつて、自分が何を書くつもりなのか、ちつとも考えていないことに気づいたが、私はひるまなかつた。そんなことは大した問題とは思えなかつた。インクがしみ出してくる瞬間や、紙とペン先がこすれ合う音や、罫線の間を埋めてゆく文字の連なりの方が、ずっと大事なのだ。大人たちはすぐに、娘が何やら夢中になって書いていると気づいたが、必要以上に干渉はしなかつた。とにかく

机の前で書き物をしているのだから、それは勉強、例えば漢字の書き取りのようなものに違いないと思ひ込んだらいい。スリッパをはいて階段を登ってはいけないとか、お風呂に入った後は冷たいものを飲んではいけないとか、あの頃課せられていた多くの禁止事項の中に、書き物が加えられなかつた代わりに、大人たちは誰も書かれた内容については興味を示さなかつた。どうせ自分たちの知っている漢字ばかりなんだから、という訳だ。

私はまず手始めに、自分の好きな本の一節を書き写してみた。『ファーブル昆虫記』のフンコロガシの章。『太陽の戦士』の出だしのところ。『アンデルセン童話集』から『ヒナギク』と『赤いくつ』。アン・シャリーが朗読する詩。『恐竜図鑑』のプテラノドンの項。『世界のお菓子』、トライフルとマカロンの作り方。……想像したよりずっとわくわくする作業だった。たとえ自分が考えた言葉ではないにしても、それらが私の指先を擦り抜けて目の前に現われた途端、いとおいしい気持ちに満たされた。

言葉たちはみんな私の味方だ。あやふやなもの、じれつたいもの、臆病なもの、何でもすべて形に変えてくれる。ブルーブラックのインクで縁取られた、言葉という形に。そしてふと気がついて手を休めると、ノート一面びっしり文字で埋めつくされている。ついさつきまでただの白い紙だったページに、意味が与えられている。しかもそれを授けたのは自分自身なのだ。

私は疲労感と優越感の両方に浸りながらページを撫で付けた。まるで世界の隠された法則を、手に入れたかのような気分だった。

書き物に対する態度が、他の大人と唯一違っていたのがキリコさんだった。干渉しない点については同じだが、彼女は明らかにこの作業を、勉強とは違う種類のものとして認めていた。

子供部屋やダイニングテーブルで作業に熱中している私を見つけると、一瞬キリコさんは立ち止まり、姿勢をただし、邪魔しないように注意を払いながら通り過ぎた。あるいはおやつを運んでくる時は、不用意にノートの中身に目やって盗み見していると誤解されないよう、気を使っているのが分かった。自分の手元に視線を落とし、一切声は掛けず、ノートからできるだけ遠いところにジュースを置いた。コップに付いた水滴で、ページが濡れてはいけないと思つたからだろう。

やがて私は他人の文章を書き写すだけでは満足できなくなり、作文とも日記ともお話ともつかないものを書き付けるようになった。クラスメイト全員の人物評と先生の悪口、一週間の食事メニュー、百万円あったら買いたい品物のリスト、テレビ漫画の予想ストーリー、自分の生い立ち・みなしご編、無人島への架空の旅行記。とにかく、ありとあらゆるものだった。

今日は何も書くことがないという日は、一日もなかつた。キャップさえ外せば、万年筆はいつでも忠実に働いた。だから初めてインクが切れた時は、うろたえた。

問一 部a～cの言葉の意味を、それぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

a 殊更に

ア いつもどおり

ウ 残念ながら

イ とりわけ

エ はかなくも

b 一足飛びに

ア 順序をふまないで一気に

イ 誰とも違って特別に

ウ 大切なことを経験せずに

エ 思い切つて本当に

c うろたえた

ア 悲しくて絶望した

イ くやくして泣いた

ウ つらくて現実逃避した

エ 驚いて取り乱した

問二 部①とありますが、どういうことですか。最も適当なものを、次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 自分が万年筆を使って何を書くかということよりも、周りでまだ誰も持っていない万年筆を手に入れたことのほうが「私」にとって重要だったということ。
- イ 自分が万年筆を使って何を書くかということよりも、万年筆を使って何かを書く時間に浸ることのほうが「私」にとって重要だったということ。
- ウ もらった万年筆を何に使うべきかということよりも、万年筆を使って宿題の漢字の書き取りをすることのほうが、「私」にとって重要だったということ。
- エ もらった万年筆を何に使うべきかということよりも、インクがどのくらいもつかどうかということのほうが、「私」にとって重要だったということ。

問三 空欄②に入るもつともふさわしい文を、次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 子供らしからぬ趣味だと嫌っていたのかもしれない
- イ よく続けられるものだと思われていたらしい
- ウ 私が何をしようかと、一切興味がなかつたようだが、敬意さえ払っていたと言ってもいい

「どうしよう、万年筆が壊れちゃった」

私は叫び声を上げた。

「もう壊しちゃったの？ せっかくのパパのお土産なのに。新しいのは買いませんからね。壊したあなたが悪いんです」

新しいのは買いませんからね——これが母の口癖であり、得意の台詞だった。私は自分の不注意を呪い、絶望して泣いた。

「大丈夫。インクが切れただけなんだから、補充すれば元通りよ」

救ってくれたのは、やはりキリコさんだった。

「スイスのインクなのよ。パパがまたスイスへ行くまで待たなきゃならないの？」

「いいえ。街の文房具屋さんへ行けば、必ず売っています」

必ずという言葉強調するように、キリコさんは大きくうなずいた。

キリコさんは正しかった。私は万年筆を壊してなどいなかった。約束どおり彼女は新しいインクを買ってきて、補充してくれた。ケースの裏に書いてある説明書は外国語だったから、二人とも読めなかったけれど、彼女は慎重に方向を見定め、崇高な儀式の仕上げをするように、万年筆の奥にインクを押し込めた。

「ほらね」

それがよみがえったのを確かめると、キリコさんは得意そうに唇をなめた。一層唇が光って見えた。

(中略)

私たちがもっと重要な秘密を共有するようになったのは、学芸会の前の日に起きた、ちょっとした事件がきっかけだった。私はメヌエットのソコを、リコーダーで吹くことになっていた。百人の五年生の中から、たった一人選ばれたのだ。

幕が上がると、拍手がおさまると、私は舞台の中央に歩み出してお辞儀をする。スポットライトが当たり、伴奏の子がピアノの鍵盤に指をのせ、みんながリコーダーを見つめる。講堂が静まり返って観客たちの期待が頂点に達したのを確かめてから、私は指を最初の音ソに合わせる。——リハーサルではそうなる予定だった。

家へ帰って、最後にもう一度だけ練習しておこうと思ひ、ランドセルを開いたらリコーダーがなかった。学校へ引き返し、教室から廊下、運動場まで歩き回り、通学路を三往復したが無駄だった。

やがて日が沈み、あたりは真つ暗になった。リコーダーは何の予告もなく、私の前から消え去り、闇に溶けていったのだ。

途方に暮れた時、どうしても母親に頼らなくてはいけないのだろう。一体彼女が何の役に立つというのだろうか。

自分が泣いているのは、リコーダーが見つからないからでも、ソコを降ろされるのが嫌だからでもない、よく分かっていて、彼女しか打ち明けるべき人がいないことが、辛いだけなのだ。

読みかけの聖書を閉じ、ほつれた綴じ糸をいじりながら彼女は言った。

「新しいのは買いませんからね」

キリコさんが声を掛けてくれたのは、私がセーターも靴下も脱ぎ捨てて、庭の花壇の縁に座り込んでいる時だった。

「一体、どうしちゃったの？」

「この間読んだ本のヒロインは、夜の風に当たって肺炎を起こしたわ」

「滅多なことで、肺炎になんかなれるもんじゃないわ。それより、笛を手に入れるのが先よ」

「もう駄目。私のリコーダーはどこにもないの」

「ゆっくり、深呼吸して考えてみましょう」

キリコさんは花壇の中からセーターを拾い上げ、枯葉を払い除けて私に着せた。

「ないんだったら、作ればいいのよ」

「作る？ どうやって？」

「木をくり貫いて、穴を開けて、吹き口のところをこんなふうに削って……」

キリコさんは手真似で木を削る格好を見せてくれた。まるで昔から、何本ものリコーダーを作ってきた人のような手つきだった。

「無理よ、そんなの。無理に決まっている」

「とにかく、まかせておいて。明日の朝、学校へ行くまでに間に合えばいいんでしょ？ さあ、肺炎にならないうちに、早く靴下をはいて、ゆっくり眠りなさい」

私はうなずいて、言われたとおりにした。明日無事にメヌエットの演奏ができると、希望を持ったからではない。彼女を疑いたくなかったからだ。

「じゃあね」

そう言っ手振しながら、キリコさんはどこかへ走って行った。

キリコさんは約束を破らなかつた。次の朝、息を弾ませて食堂へ駆け込んできた。右手にしっかりとリコーダーを握り締めて。

問四

部③とありますが、これはどういうことを表していますか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 「私」はいつでも万年筆を大切に使っていたので、万年筆に魂が宿り、「私」のためにひとりで書くようになったということ。

イ 「私」は好きな本の一節を書き写し、誰かの文章を紙の上に再現するのが楽しくて、ひたすら万年筆で書き写していたということ。

ウ 「私」は、自分で考えた書きたいことが次から次へとあふれてきて、万年筆はいつでもそれらを書く手伝いをしてくれたということ。

エ 「私」は以前は書きまちがいが多かったが、万年筆を使ってからは、いつでも正確に書くことができるようになったということ。

問五

部④とありますが、

(1) 「彼女」とはだれのことですか。答えなさい。

(2) なぜ、「彼女」が打ち明けるべき人がいないことが、辛いのですか。その理由として最も適当なものを、次の中から選んで記号で答えなさい。

ア 「彼女」がリコーダーを無くして困っている自分に寄り添ってはくれず、いつもと同じそっけない対応しかしてくれないだろうと分かっていたから。

イ ソコという重要な役目を任されたにも関わらずリコーダーを無くしてしまったことで、きびしい「彼女」にしかられることを恐れていたから。

ウ リコーダーが無ければソコを降ろされてしまうかもしれない、それを期待していた「彼女」に知られるとがっかりさせてしまうと思ったから。

エ 「彼女」はいつも新しいものは買ってくれないため、せっかくの晴れ舞台に古いリコーダーで演奏しなければならぬことが悲しかったから。

削りたての木の香りがまだ残っていた。口は少し太めで、穴はザラザラし、吹くところから木屑の粉が飛び散ったが、それは間違いなくリコーダーだった。どこから眺めても、真正銘の本物だった。

本番で私の吹くメヌエットは、講堂の冷たい空気を震わせ、観客たちの頬を包み、窓ガラスをすり抜けて空の高いところへ吸い込まれていった。天によって選ばれ、特別にあつらえられた音だった。

私はノートに書きためた物語から一番のお気に入りを用意紙に清書し、リボンで綴じ、キリコさんにプレゼントした。

後で知ったことだが、彼女は以前勤めていた家具工場の職人さんに頼んで、リコーダーを作ってもらったらしい。正しい音階が出るまで、十本以上やり直しが必要だった。本当は食卓の脚になるはずの木だった。

「ありがとう。とっても素晴らしい物語ね。お城の図書室に住むクマネズミが、ヒキガエルを誘って地下牢を検査する場面がいいわ。ほら、泉が湧き出しているのを発見して、二人が一緒に泳ぐの。ヒキガエルがクマネズミの前脚をしっかりと握って、水かきでおしりを持ち上げてやる、あそこが一番好きよ」

キリコさんは喜んでくれた。そしてますます、私の書き物の時間を、大事に扱ってくれるようになった。お札にプレゼントしたのがどんなお話だったのか、今ではすっかり忘れてしまった。ただ泉を泳ぐ場面がよかったと言う、キリコさんの言葉を覚えているだけだ。

クマネズミとヒキガエルの物語は、今頃どこでどうしているのだろう。生まれて初めて人を喜ばせた、私の物語。作者の記憶から消え去ってもまだ、世界のどこかで息をひそめているのだろうか。

(小川洋子「キリコさんの失敗」(『偶然の祝福』所収)による)

注1 アイシャドー——まぶたにつける化粧品の種類。

注2 テレビ漫画——アニメーションのこと。

注3 もっと重要な秘密を共有するようになった——以前、「私」はキリコさんに頼んで、母に禁止されている外食をしたことがあり、それを二人だけの秘密にしていた。

注4 メヌエットのソロ——「メヌエット」は曲名。「ソロ」は、一人で演奏すること。

三

部のカタカナは漢字に直し、漢字はその読みをひらがなで答えなさい。

- ① 不用意な発言で失笑された。
- ② 試合に負けて号泣した。
- ③ 彼は高潔な志を持っている。
- ④ 旧友に再会する。
- ⑤ 署名活動を行う。
- ⑥ 美しいヤケイを眺める。
- ⑦ 発生のジヨウケンを調べる。
- ⑧ マフラーをアんだ。
- ⑨ 川にソって歩いている。
- ⑩ イッシンフランに努力している。

問六 本文を通して、「キリコさん」は「私」にとつてどのような存在だったといえますか。その説明として最も適当なものを、次の中から選んで記号で答えなさい。

- ア 「私」が何かしようとしたとき、いつもあれこれ口を出してくる、うっとうしい存在。
- イ 「私」がまちがえたとき、どうすればよかったか教えてくれる、教師のような存在。
- ウ 「私」が困ったとき、いつも親身になって解決してくれる、頼りになる存在。
- エ 「私」が責められたとき、いつも味方になってかばってくれる、信頼できる存在。